HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クマ会議総括 ： 座談会より
Author(s)	坪田, 敏男; 間野, 勉; 大舘, 智志 他
Citation	新ひぐま通信 別冊 ： 第7回国際クマ会議報告書, 25-30
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91580
Type	report
File Information	zadankai.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7回国際クマ会議報告書：25－30（1986）

クマ会議総括～座談会より～

出席者　坪田敏男
　　間野勉
　　大舘智志
書記　園山慶

Ⅰ．会議の印象

○クマ会議の第1印象は、

－本会議が始まる前日のEastern Black Bear Workshopに参加した時に、その活気ある討論に強烈な印象を受けた。

－このWorkshopに出たことで英語に対する不安感と会議の盛り上がりに対する期待感の両方を持った。

－まず、会議の熱気を肌で感じた。

－結局、会議が終わるまでその雰囲気が続いた。

○会議の日程は、

－発表演題が50余、それにWorkshop、野外見学会が盛り込まれ、スケジュールはとてもハードなものであった。

－野外見学会の日には、帰ってきてから30分もたたないうちにWorkshopが催され、飯もろくろく食べられなかった。それでもWorkshopには多くの人が参加していたのには驚いた。

○2つの会議場（アメリカとユーゴスラビア）に分れたことについては、

－行く前は、2ヵ所に分れて会議が開かれることを知らず、欧州やソ連からの発表にも期待していたが、聞けずに終わって残念であった。

－欧州、ソ連でのクマの研究はまだあまり進んでおらず、ある面では日本との共通点があるだろうから話をしたかったのだが。

－しかし、北米でのクマの研究はかなり進んでおり、発表内容は充実していた。

○参加者について

－全部で百数十人が集まった。

－若い人も多く、研究者の層の厚さを感じた。それと女性研究者が多いという印象を受けた。例えばアラスカ大学からの発表3題のうち2題が女性による発表であった。
－発表者の中では、我々が最年少の部類であったのではないだろうか。

○北米人の発表のし方
－概して北米人は皆発表が上手い。彼らは、小さい頃からこういった発表の訓練を受けている。
－スライドにマンガを使ったり、所々にジョークを入れたりして全体的になごやかな雰囲気であった。
－英語の発表あるいはディスカッションを聞いていて、文化の違いを知った。とくに英語のもつ特徴からか、言い方がはっきりしていてぼやかすことがない。したがって各自の主張は正々堂々と立派なものに聞こえる。

○会議の運営と会議全体を通して感じたこと、
－時間の厳守には気持ちがよかった。
－司会者の上手さが光った。
－残念ながら我々の方は時差ボケや旅疲れで体調が万全でなかった。
－一つ残念だったのは、発表の最終日の生理と成長のSESSIONでは、聴視者の人数がぐっと減ったことがある。やはり全体としては、フィールド活動中心の生態学に興味を持っている人が多いので、いた仕方ないのかもしれない。

II．発表内容と日本からの発表に対する反応

○日本からは我々の4題とツキノワグマで羽澄氏が1題発表したが、
－全体として、日本からの発表に関心が強かったようだ。我々の発表を静聴してくれた。
－青井氏の発表の中でササブッシュのスライドにはどよめきが起こった。
－むこうの研究者は、日本（北海道）にいるクマがどんなものであるのか、そしてクマが棲んでいる日本の森林環境がどんなものであるのか、という2点に興味があったようだ。現在アメリカでは、繁殖と環境あるいは密度と環境という視点での研究が行われているので、特に捕獲数の多さとそれが持続している点について、そしてそれだけの数を維持している森林の許容量について興味を持っているようだ。

○むこうの研究者は、常にクマとそれをとりまく環境との関係ということを視点としてみているが、

－それは極く極く当然のこととして考えられるが、改めて基本的なことを教えられた。
－むこうでは、専門的な生態学の教育を受けていることが基礎として身についているのだろう。

○全体的な研究の方向性として保護管理（マネージメント）のことが常に含まれているが、
－その根底になる視点は、クマとそれをとりまく環境との両方の保護管理ということがある。
－今回の発表の中で具体的なものがいくつか出された。例えばナラ林の保護管理、あるいは林道敷設の管理など。
－個体群動態の Workshop でもやはり保護管理に関する話題が多かった。逆にいえば、多くの地域で開発や狩猟によって個体群の将来が心配され、そうせざるを得ない状況になっている結果かもしれない。
－その面では北海道も同じような状況下にあるのではないか。しかし保護管理の困難性ゆえに、クマ研でも論議が進まないところである。

○林学的な視点からの発表が多かったのでは、
－クマの問題は森林開発、保護と深い関わりがあるからであろう。

○個体群動態に関する研究が多かったが、
－個体群動態についての研究は、この約10年間あまり進歩していないのでないか。つまり個体群動態に影響を与える要因として繁殖と死亡があげられ、前者は生息地の食物の生産性、後者は個体間関係に依存するとする考えが10年前に既に提起されている。そのレベルを今も追随しており、あまり進歩がみられない。

○純粋な生物学的な発表が少なかったが、
－数は少なかったが、中には行動生態学、進化生態学的視点からの研究もあり興味深かった。
－各研究者とももちろん生物学的な分野に興味はあるのだろうけれども、立場上と必要性とから保護管理に関する研究を行わなければならないのだろう。
－D. J. Mottson 氏の発表（イエローストーン国立公園におけるハイイログマの食性）は興味深く聞けた。現在我々が大雪山で行っている研究の方向性と同じ。つまり食性とその利用地の栄養学的な評価などをテーマにしている。
－彼は個体群についての研究でもかなり鋭い仕事をやっている。

○生理学的な研究は予想通り少なかったが、

－飼育個体での研究がいくつかあったが、やはり生理学と野生のクマとを直接結びつけるのは難しいのだろう。
－今後期待できる分野だ。
－生態学をやっている人でも生理学的な分野に興味があるようで、知識として豊富なのには驚いた。

○テレメトリィ調査に関して
－今回の発表を聞いていてアメリカではテレメトリィは常法のように使われていることがよくわかった。
－現在、アメリカでクマの研究を始める時にまず何をするかといえばテレメをするという感じで、日本でテレメが上手くいかないことについて、むこうの人間はひどく不思議がっていた。
－ただ、むこうでもアメリカクロクマとヒグマとでのやり易さの違いはあるようだ。

Ⅲ．各種クマでの研究
○クロクマとヒグマとの違いについて、
－まず、クロクマとヒグマとの扱い易さは全然違うということだ。むこうの研究者はクロクマをほとんど恐れていない。
－しかし一般人はクロクマも猛獣とみており、事実危険な動物である。
－一般人にはクロクマとヒグマの区別なんてできていないのではないか。
－研究内容、成果の差異もこのような扱い易さの違いから生じているのではないだろうか。
－研究者をみても、クロクマとヒグマをやっている人間で違いが感じられた。クロクマをやっている人間は几帳面、ヒグマをやっている人間は大雑把。
－今のクマの研究をみると、クロクマの研究者がクマ全体の研究を引っ張っているという感じだ。
－クロクマでは扱い方が安易ということから、研究がやり易く成果も得易いということはあるだろう。

○メガネグマ、マレーグマ、ナマケグマについて、
－まだ研究はほとんど進んでいないようだ。
－ただ、序々に北米人が研究に手をつけ出しているし、今後も彼らが研究を進めていくのだろう。

○ホッキョクグマは、

－個体群の総合的な解析が試みられており、他のクマ類よりも個体群解析では一歩進んでいるという印象を受けた。

Ⅳ. 研 究 体 制

○むこうの研究施設としては、

－National Park, Fish & Game, U. S. Forest, 各大学、etc, と多くの機関がある。

－特に大学での大型哺乳類の研究の実体を見てうらやましく思えた。場と指導者の豊かさということで。

○資金的には、

－むこうは、日本に比べればはるかにリッチだ。州、政府が予算を出しプロジェクトを組んでいる。またその他に私的な基金もある。

－しかしむこうでも資金的には決して充分なものではないらしい。

－ただ、金をもらう時に大学なり研究施設などがあり、信頼のおける「受け皿」が用意されている点で、日本とは全く違う。

○日本とアメリカの研究体制の違いは、

－むこうは既に研究体制がしっかりしているので、研究もその上でどんどん進められる。日本では極く基本的な体制すらできていない。具体的な一例として、北海道に「野生生物情報センター」（小川巌代表）ができただけでも、野生生物に関する仕事がこれまでよりはるかにスムーズにいくことがある。

－しかし逆にみれば、むこうの研究者がやらないようなことまでも、我々はやらざるを得ないので、そういった点では、クマに関わる人間が個人的に得るものは豊富かもしれない。

○行政側からの研究への関与について、

－アメリカでは行政機関自らがフィールドに出て研究を行っていることが、日本とは全く違う点である。

－しかしそういった行政の存在形態、意識をつくらせるまでの研究者の努力は大変なものであったと思う。日本ではこれから最下位のレベルから序々につくっていく必要がある。まず、社会へのアピールが最優先されるのではないか。また、研究成果の還元、give & take の在り方がむこうでは充実している。

○アメリカでは一般の人々の needs があるということもあるのでは、
－needs をもたせるのもやはり問題意識をもった側からのアピールがあったのだろう。
－しかし一般人の問題意識としては、日本と大差ないような気もする。
－今後日本でクマの保護管理を考えていく場合、まず現在全くの無策であるという認識を確立し、その上で人口密度の高さを考慮しながらやっていく必要があると思う。

Ⅴ．今後の北海道でのヒグマ研究の方向性

○北海道固有の生息地の評価を北米などと比較していくのが一つの方向性では、
－ひとつは「島」であることを考えた場合、隔離された個体群として捉えるとおもしろい。
－個体群動態の指標として努力すれば多量のデータをひろえるのであるから、それを利用しない手はない。
－人為的影響を大きく受けている個体群であるということを念頭におく必要がある。したがって最終的には保護管理について言及する必要があろう。
－更に研究する者として、今後研究対象のヒグマが絶滅する危険性もあるわけで、それを回避するためにも保護管理に関する論議をすることは不可欠なことではないか。

○過去クマ研は食性を中心に研究をやってきたが今後は、
－やはり生息環境との関係について言及していく必要があると思う。また、ツキノワグマとの比較という点で、環境利用の相違等から両方の種の生態的特徴を比較していく必要もあるだろう。
－テレメを使って生息地を把握する必要がある。特に環境＝食物の生産性の季節変動とクマの活動性との関連について。
－テレメに関しては、まずは方法論の確立が急務。常法化しないと話にならない。
－捕獲努力量の差は大きいのでオリを増やすことが必要だ。
－さらに、テレメを行うフィールドの選択、研究のテーマ、方向性をきちんと考える必要があるのではないか。

以上、国際クマ会議に参加してきた人間で各自の意見、感想を述べてみた。今後、この内容をいかにクマ研の活動に生かし、また日本で実現していくかが我々に課せられた大きな課題だと考えている。